

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(小学校, 中学校)

第3編 題材ごとの学習評価について(事例)

【案】

第1章 「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方を踏まえた評価規準の作成

- 1 本編事例における学習評価の進め方について
- 2 題材の評価規準の作成のポイント

第2章 学習評価に関する事例について

- 1 事例の特徴
- 2 各事例概要一覧

事例

第1章 「内容のまとめりごとの評価規準」の考え方を踏まえた評価規準の作成

1 本編事例における学習評価の進め方について

各教科の単元（題材）における観点別学習状況の評価を実施するに当たり、まずは年間の指導と評価の計画を確認することが重要である。その上で、学習指導要領の目標や内容、「内容のまとめりごとの評価規準」の考え方等を踏まえ、以下のように進めることが考えられる。なお、複数の単元（題材）にわたって評価を行う場合など、以下の方法によらない事例もあることに留意する必要がある。

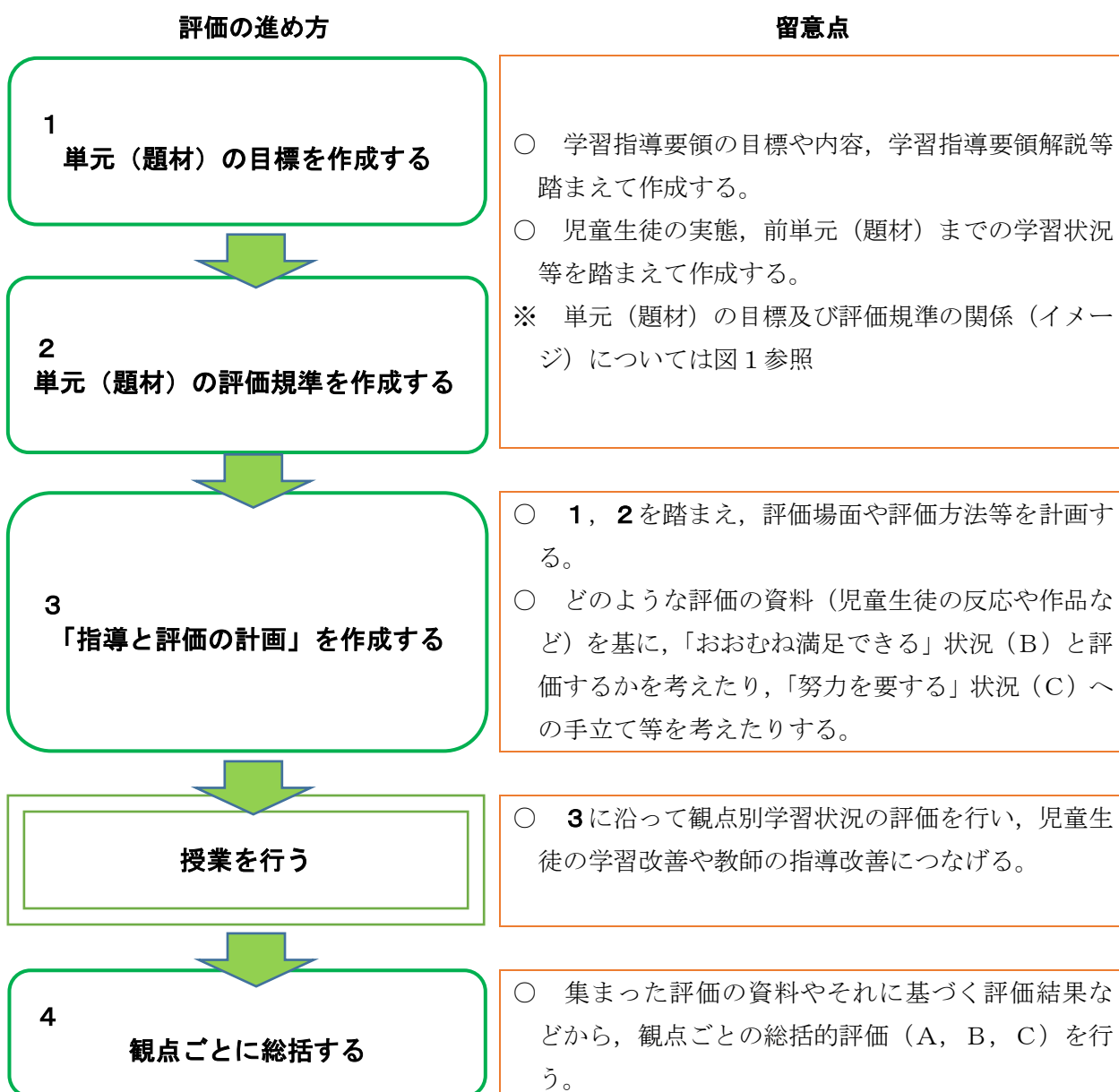
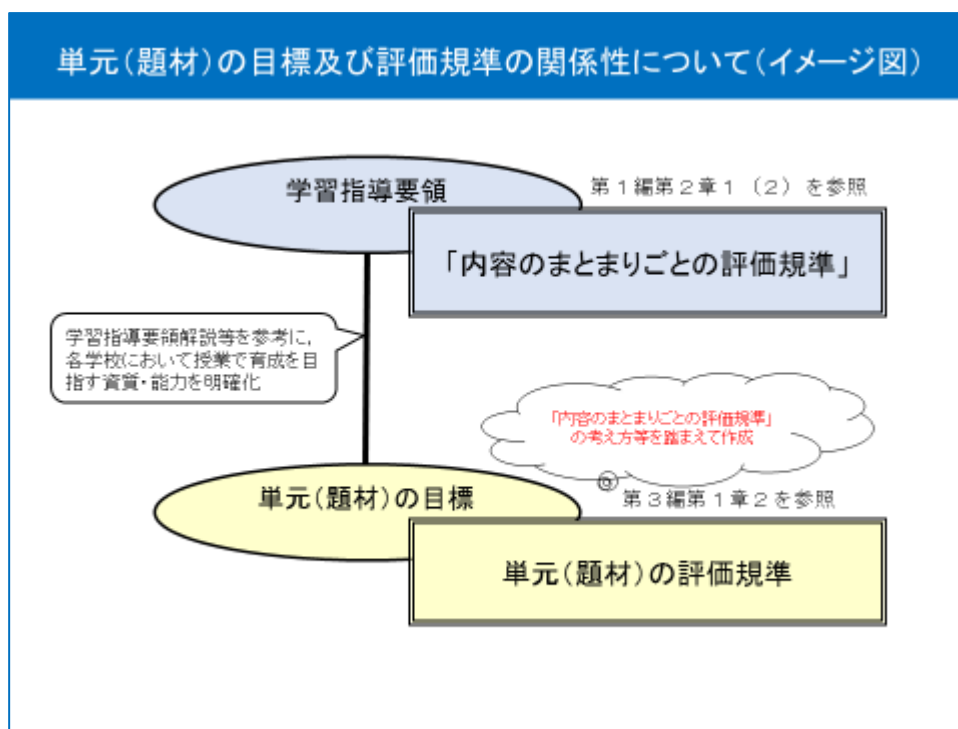


図 1



※ 調整中

2 題材の評価規準の作成のポイント

小学校図画工作科においては、造形遊びをする活動では、「A表現」(1) ア, (2) ア, [共通事項] (1) ア, (1) イを, 絵や立体, 工作に表す活動では、「A表現」(1) イ, (2) イ, [共通事項] (1) ア, (1) イを, 鑑賞する活動では「B鑑賞」(1) ア, [共通事項] (1) ア, (1) イを指導する。

造形遊びをする活動と, 鑑賞する活動を関連付けて指導する場合は, 「A表現」(1) ア, (2) ア, 「B鑑賞」(1) ア, [共通事項] (1) ア, (1) イを指導し, 絵や立体, 工作に表す活動と, 鑑賞する活動を関連付けて指導する場合は, 「A表現」(1) イ, (2) イ, 「B鑑賞」(1) ア, [共通事項] (1) ア, (1) イを指導する。

図画工作科では, これらの内容を題材として児童に提示し, 資質・能力の育成を目指すことになる。それには, 2 ページの学習評価の進め方で示しているように, まず題材の目標を設定し, 次に題材の評価規準を作成することが大切である。そこで, まず題材の目標の設定について例を基に説明し, 次に題材の評価規準の作成のポイントを示す。

(1) 図画工作科における題材の目標の設定

図画工作科では, 学年の目標を学校や児童の実態などに応じ, 弾力的な指導を重視する観点から, 第1 学年及び第2 学年(低学年), 第3 学年及び第4 学年(中学年), 第5 学年及び第6 学年(高学年) の2 学年ごとにまとめて示している。各学年においては, 2 学年間を見通し, 学年間の関連を図るとともに, その1 年間に必要な経験などを配慮しながら, それぞれの学年にふさわしい内容を選択して指導計画を作成し, 目標の実現を目指すことになる。

これを踏まえ, 学習指導要領の目標や内容, 学習指導要領解説, 児童の実態, 前題材までの学習状況等を踏まえて, 題材の目標を作成し設定する。

なお, 次に示す題材の目標の作成の手順は例として示すものである。

題材の目標の作成手順

1 その題材で指導する事項を学習指導要領で確認する。

学習指導要領の「学年の目標」「内容」や学習指導要領解説等を基に, 指導することを確認する。「知識及び技能」「思考力, 判断力, 表現力等」は「内容」を参考にし, 「学びに向かう力, 人間性等」は, 学年の目標(3)を参考にする。

例：低学年の造形遊びする活動と鑑賞する活動

(1) 知識及び技能

- ・自分の感覚や行為を通して, 形や色などに気付くこと。([共通事項] (1) ア)
- ・造形遊びをする活動を通して, 身近で扱いやすい材料や用具に十分に慣れるとともに, 並べたり, つないだり, 積んだりするなど手や体全体の感覚などを働かせ, 活動を工夫してつくること。(A表現(2)ア)

(2) 思考力, 判断力, 表現力等

- ・造形遊びをする活動を通して, 身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に造形的な活動を思い付くことや, 感覚や気持ちを生かしながら, どのように活動するかについて考えること。(A表現(1)ア)
- ・身の回りの作品などを鑑賞する活動を通して, 自分たちの作品や身近な材料などの造形的な面白さや楽しさ, 表し

- たいこと、表し方などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げること。(B鑑賞(1)ア)
- ・形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。〔〔共通事項〕(1)イ〕
- (3) 学びに向かう力、人間性等
- ・楽しく表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しい生活を創造しようとする態度を養う。(学年の目標(3))

2 題材に即してどのような内容が当てはまるか考える。それを踏まえ、書き換えたり削除したりする。

(※学習指導要領で示している「学年の目標」や「内容」は、2年間を通して実現することを目指すものであることから、その題材では指導しない内容が含まれていることも考えられるため。)

それぞれの指導事項の「造形遊びをする活動を通して」「絵や立体、工作に表す活動を通して」「身の回りの作品などを鑑賞する活動を通して」などは、内容のまとまりを示すものなので削除する。文末の「こと」も削除する。その上で、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」は「内容」を、「学びに向かう力、人間性等」は学年の目標(3)を参考にし、書き換えたり削除したりする。

「知識及び技能」について

「知識」

- 全ての題材において、低学年の「形や色など」、中学年の「形や色などの感じ」、高学年の「形や色などの造形的な特徴」については、指導計画の作成と内容の取扱い2(3)「〔共通事項〕のアの指導」を参考にして、題材に即して具体的に示すことが考えられる。

内容の取扱い2(3)

〔共通事項〕のアの指導に当たっては、次の事項に配慮し、必要に応じて、その後の学年で繰り返し取り上げること。

- ア 第1学年及び第2学年においては、いろいろな形や色、触った感じなどを捉えること。
- イ 第3学年及び第4学年においては、形の感じ、色の感じ、それらの組合せによる感じ、色の明るさなどを捉えること。
- ウ 第5学年及び第6学年においては、動き、奥行き、バランス、色の鮮やかさなどを捉えること。

例

- ・自分の感覚や行為を通して、いろいろな形や色、触った感じなどに気付く。(低学年)
- ・自分の感覚や行為を通して、形の感じ、色の感じ、それらの組合せによる感じが分かる。(中学年)
- ・自分の感覚や行為を通して、奥行きや動きを理解する。(高学年)

- 全ての題材において、「自分の感覚や行為を通して」については、題材に即して具体的に示すことが考えられる。

例

- ・友達の作品を見るときの感覚や行為を通して、形の感じ、色の感じ、それらの組合せによる感じが分かる。(中学年 鑑賞)

- ・見たことから表したいことを見付けたり、表したいことに合わせて表し方を工夫して表したりするときの感覚
や行為を通して、奥行きや動きを理解する。(高学年 絵や立体、工作)

「技能」

- 全ての題材において、全学年の「材料や用具」、中学年、高学年の「前学年までの材料や用具」については、指導計画の作成と内容の取扱い2(6)「材料や用具」を参考にして、題材に即して具体的に示す。

内容の取扱い2(6)

材料や用具については、次のとおり取り扱うこととし、必要に応じて、当該学年より前の学年において初歩的な形で取り上げたり、その後の学年で繰り返し取り上げたりすること。

- ア 第1学年及び第2学年においては、土、粘土、木、紙、クレヨン、パス、はさみ、のり、簡単な小刀類など身近で扱いやすいものを用いること。
- イ 第3学年及び第4学年においては、木切れ、板材、^{くぎ}釘、水彩絵の具、小刀、使いやすいのこぎり、金づちなどを用いること。
- ウ 第5学年及び第6学年においては、針金、糸のこぎりなどを用いること。

例

- ・土や砂に十分に慣れるとともに、並べたり、つないだり、積んだりするなど手や体全体の感覚などを働かせ、活動を工夫してつくる。(低学年 造形遊び)
- ・水彩絵の具を適切に扱うとともに、クレヨンについての経験を生かし、手や体全体を十分に働かせ、表したいことに合わせて表し方を工夫して表す。(中学年 絵や立体、工作)
- ・活動に応じて材料や用具を活用するとともに、前学年までの板材についての経験や技能を総合的に生かしたり、方法などを組み合わせたりするなどして、活動を工夫してつくる。(高学年 造形遊び)

「思考力、判断力、表現力等」について

- 造形遊びをする活動における、低学年の「身近な自然物や人工の材料の形や色など」、中学年の「身近な材料や場所など」、高学年の「材料や場所、空間などの特徴」については、指導計画の作成と内容の取扱い2(6)「材料や用具」などを参考にして、題材に即して具体的に示す。

内容の取扱い2(6)

材料や用具については、次のとおり取り扱うこととし、必要に応じて、当該学年より前の学年において初歩的な形で取り上げたり、その後の学年で繰り返し取り上げたりすること。

- ア 第1学年及び第2学年においては、土、粘土、木、紙、クレヨン、パス、はさみ、のり、簡単な小刀類など身近で扱いやすいものを用いること。
- イ 第3学年及び第4学年においては、木切れ、板材、^{くぎ}釘、水彩絵の具、小刀、使いやすいのこぎり、金づちなどを用いること。
- ウ 第5学年及び第6学年においては、針金、糸のこぎりなどを用いること。

例

- ・紙の形や色などを基に造形的な活動を思い付き，感覚や気持ちを生かしながら，どのように活動するかについて考える。(低学年 造形遊び)
- ・木切れや図工室などの場所を基に造形的な活動を思い付き，新しい形や色などを思い付きながら，どのように活動するかについて考える。(中学年 造形遊び)
- ・透明シートや校舎内の空間などの特徴を基に造形的な活動を思い付き，構成したり周囲の様子を考え合わせたりしながら，どのように活動するかについて考える。(高学年 造形遊び)

- 絵や立体，工作に表す活動における，低学年の「感じたこと，想像したこと」，中学年の「感じたこと，想像したこと，見たこと」，高学年の「感じたこと，想像したこと，見たこと，伝え合いたいこと」については，題材に即して選択し，さらに具体的に示す。

例

- ・材料に触れながら感じたこと，想像したことから，表したいことを見付け，好きな形や色を選んだり，いろいろな形や色を考えたりしながら，どのように表すかについて考える。(低学年 絵や立体，工作)
- ・生き物を見たことから，表したいことを見付け，形や色，材料などを生かしながら，どのように表すかについて考える。(中学年 絵や立体，工作)
- ・学校を過ごしやすくするために伝え合いたいことから，表したいことを見付け，形や色，材料の特徴，構成の美しさなどの感じ，用途などを考えながら，どのように主題を表すかについて考える。(高学年 絵や立体，工作)

- 鑑賞する活動における，低学年の「自分たちの作品や身近な材料など」，中学年の「自分たちの作品や身近な美術作品，製作の過程など」，高学年の「自分たちの作品，我が国や諸外国の親しみのある美術作品，生活の中の造形など」は，題材に即して選択する。さらに具体的に示すことも考えられる。

例

- ・自分たちの作品の造形的な面白さや楽しさ，表したいこと，表し方などについて，感じ取ったり考えたりし，自分の見方や感じ方を広げる。(低学年 鑑賞)
- ・身近な美術作品の造形的なよさや面白さ，表したいこと，いろいろな表し方などについて，感じ取ったり考えたりし，自分の見方や感じ方を広げる。(中学年 鑑賞)
- ・生活の中の造形の造形的なよさや美しさ，表現の意図や特徴，表し方の変化などについて，感じ取ったり考えたりし，自分の見方や感じ方を深める。(高学年 鑑賞)

- 全ての題材において、低学年の「形や色など」、中学年の「形や色などの感じ」、高学年の「形や色などの造形的な特徴」については、指導計画の作成と内容の取扱い2(3)「〔共通事項〕のアの指導」を参考にして、題材に即して具体的に示すことが考えられる。

内容の取扱い2(3)

〔共通事項〕のアの指導に当たっては、次の事項に配慮し、必要に応じて、その後の学年で繰り返し取り上げることを。

- ア 第1学年及び第2学年においては、いろいろな形や色、触った感じなどを捉えること。
- イ 第3学年及び第4学年においては、形の感じ、色の感じ、それらの組合せによる感じ、色の明るさなどを捉えること。
- ウ 第5学年及び第6学年においては、動き、奥行き、バランス、色の鮮やかさなどを捉えること。

例

- ・ いろいろな形や色、触った感じを基に、自分のイメージをもつ。(低学年)
- ・ 形の感じ、色の感じ、それらの組合せによる感じを基に、自分のイメージをもつ。(中学年)
- ・ 動きやバランスなどの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつ。(高学年)

「学びに向かう力、人間性等」について

- 題材に即して「表現する活動」や「鑑賞する活動」を具体的に示す。

例

- ・ 楽しく新聞紙で造形遊びをする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しい生活を創造しようとする態度を養う。(低学年 造形遊び)
- ・ 進んで水彩絵の具で絵に表す活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養う。(中学年 絵や立体、工作)
- ・ 主体的に我が国の親しみのある美術作品を鑑賞する活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養う。(高学年 鑑賞)

なお、題材の目標の示し方は、(1) 知識及び技能 (2) 思考力、判断力、表現力等 (3) 学びに向かう力、人間性などに分けて示す方法や、全体を一文にする方法などが考えられる。どのような示し方がよいか各学校や地域で検討することも重要である。

(2) 題材の評価規準の作成のポイント

題材の評価規準の作成は、内容のまとまりごとの評価規準から作成する方法と、内容のまとまりごとの評価規準を踏まえ、題材の目標から作成する方法が考えられる。どちらの方法でも、評価規準はほぼ同じ内容になる。

1 内容のまとまりごとの評価規準を踏まえ、題材の目標から作成する方法

(1) 知識・技能

- 文末は、学習の状況の評価することを踏まえて「～している」とする。

(2) 思考・判断・表現

- 「思考・判断・表現」は、〔共通事項〕(1)イに続けて「A表現」(1)アまたは〔共通事項〕(1)イに続けて「B鑑賞」(1)アを示し、「自分のイメージをもつ」を「自分のイメージをもちながら、」とする。ただし、「～しながら、～しながら」と続く文章になる場合、自分のイメージをもちながら発想や構想をしたり、鑑賞したりするということを踏まえつつ、「自分のイメージをもち、」とすることも考えられる。
- 文末は、学習の状況の評価することを踏まえて「～している」とする。

(3) 主体的に学習に取り組む態度

- 「主体的に学習に取り組む態度」は、「学びに向かう力、人間性等」から、観点別に学習状況の評価するものだけを示す。具体的には、低学年の「形や色などに関わり楽しい生活を創造しようとする態度を養う」、中学年、高学年の「形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養う」は、個人内評価とするため削除する。「活動」を「学習活動」とする。文末は、学習の状況の評価することや児童の意志的な側面も評価することから「～しようとしている」とする。

2 内容のまとまりごとの評価規準から作成する方法

第2編で示している内容のまとまりごとの評価規準を基に、次の手順で作成する。

(1) 知識・技能

「知識」

- 全ての題材において、低学年の「形や色など」、中学年の「形や色などの感じ」、高学年の「形や色などの造形的な特徴」については、指導計画の作成と内容の取扱い2(3)「〔共通事項〕のアの指導」を参考にして、題材に即して具体的に示すことが考えられる。
- 全ての題材において、「自分の感覚や行為を通して」については、題材に即して具体的に示すことが考えられる。

「技能」

- 全ての題材において、全学年の「材料や用具」、中学年、高学年の「前学年までの材料や用具」については、指導計画の作成と内容の取扱い2(6)「材料や用具」を参考にして、題材に即して具体的に示す。

(2) 思考・判断・表現

- 造形遊びをする活動における，低学年の「身近な自然物や人工の材料の形や色など」，中学年の「身近な材料や場所など」，高学年の「材料や場所，空間などの特徴」については，指導計画の作成と内容の取扱い2(6)「材料や用具」などを参考にして，題材に即して具体的に示す。
- 絵や立体，工作に表す活動における，低学年の「感じたこと，想像したこと」，中学年の「感じたこと，想像したこと，見たこと」，高学年の「感じたこと，想像したこと，見たこと，伝え合いたいこと」については，題材に即して選択する。さらに具体的に示す。
- 鑑賞する活動における，低学年の「自分たちの作品や身近な材料など」，中学年の「自分たちの作品や身近な美術作品，製作の過程など」，高学年の「自分たちの作品，我が国や諸外国の親しみのある美術作品，生活の中の造形など」は，題材に即して選択する。さらに具体的に示すことも考えられる。
- 全ての題材において，低学年の「形や色など」，中学年の「形や色などの感じ」，高学年の「形や色などの造形的な特徴」については，指導計画の作成と内容の取扱い2(3)「〔共通事項〕のアの指導」を参考にして，題材に即して具体的に示すことが考えられる。

(3) 主体的に学習に取り組む態度

- 題材に即して「表現する活動」や「鑑賞する活動」を具体的に示す。

<例1 第1学年及び第2学年の「造形遊び」>

題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・ 自分の感覚や行為を通して，形や色などに気付いている。 ・ 紙に十分に慣れるとともに，並べたり，つないだり，積んだりするなど手や体全体の感覚などを働かせ，活動を工夫してつくっている。	形や色などを基に，自分のイメージをもちながら，紙の形や色などを基に造形的な活動을思い付き，感覚や気持ちを生かしながら，どのように活動するかについて考えている。	つくりだす喜びを味わい楽しく紙で造形遊びをする学習活動に取り組もうとしている。

<例2 第3学年及び第4学年の「絵や立体，工作」>

題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・ 自分の感覚や行為を通して，形や色など感じが分かっている。 ・ 木片やのこぎり，接着剤を適切に扱うとともに，前学年までの木についての経験を生かし，	形や色などの感じを基に，自分のイメージをもちながら，木片を切ったり組み合わせたりして想像したことから，表したいことを見付け，形や色，材料などを生かしながら，どのように	つくりだす喜びを味わい進んで木を切ったり組み合わせたりしながら立体に表す学習活動に取り組もうとしている。

手や体全体を十分に働かせ、表したいことに合わせて表し方を工夫して表している。	表すかについて考えている。	
--	---------------	--

<例3 第5学年及び第6学年の「鑑賞」>

題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
自分の感覚や行為を通して、形や色などの造形的な特徴を理解している。	形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもちながら、我が国の親しみのある美術作品などの造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深めている。	つくりだす喜びを味わい主体的に我が国の親しみのある美術作品を鑑賞する学習活動に取り組もうとしている。

第2章 学習評価に関する事例について

1 事例の特徴

第1編第1章2（4）で述べた学習評価の基本的な方向性を踏まえつつ、平成29年改訂学習指導要領の趣旨・内容の徹底に資する評価の事例を示すことができるよう、本参考資料における各教科の事例は、原則として以下のような方針を踏まえたものとしている。

○ 単元（題材）に応じた評価規準の設定から評価の総括までとともに、児童生徒の学習改善及び教師の指導改善までの一連の流れを示している

本参考資料で提示する事例は、いずれも、単元（題材）の評価規準の設定から、最終的に学習過程で得た評価情報を総括するまでとともに、評価結果を児童生徒の学習改善や教師の指導改善に生かすまでの一連の学習評価の流れを念頭においたものである。なお、各教科とも事例の一つは、この一連の流れを特に丁寧に示している。

○ 観点別の学習状況について評価する時期や場面の精選について示している

報告や改善等通知では、学習評価については、日々の授業の中で児童生徒の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要であり、観点別の学習状況については、毎回の授業ではなく原則として単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、その場면을精選することが重要であることが示された。このため、観点別の学習状況について評価する時期や場面の精選について、「指導と評価の計画」の中で、具体的に示している。

○ 評価方法の工夫を示している

各教科・科目の評価の中で、ワークシートや作品などの評価材料をどのように活用したかなど、教科の特性に応じて、評価方法の多様な工夫について示している。

2 各事例概要一覧

事例1 キーワード 指導と評価の計画から評価の総括まで

「のこぎりザクザク生まれる形」(第3学年)

本事例は、第3学年において、立体に表す活動や鑑賞する活動を通して資質・能力の育成を目指す題材の事例である。評価規準として「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点全てを設定している。本事例では、まず指導と評価の計画について述べた上で、3つの観点を踏まえた評価の事例を紹介している。特に、児童の活動の様子や作品などを具体的に取り上げながら、指導と評価の計画の立て方、評価の回数や場面、学習の状況などについて解説し、題材における評価の総括について紹介している。

事例2 キーワード 「思考・判断・表現」の評価

「ひらいたはこから」(第2学年)

本事例は、第2学年において、絵に表す活動を通して資質・能力の育成を目指す題材の事例である。評価規準として「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点全てを設定しているが、本事例では、特に「思考・判断・表現」の評価の時期や評価方法について紹介している。まず指導と評価の計画について述べた上で、「思考・判断・表現」の評価の事例を紹介している。さらに「知識」の評価についても、児童の姿を基に紹介している。

事例3 キーワード 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

「花に心をこめて」(第4学年)

本事例は、第4学年において、工作に表す活動や鑑賞する活動を通して資質・能力の育成を目指す題材の事例である。評価規準として「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点全てを設定しているが、本事例では、特に「主体的に学習に取り組む態度」について紹介している。まず指導と評価の計画について述べた上で、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」と関わらせながら「主体的に学習に取り組む態度」の評価の事例を紹介している。さらに「知識」の評価についても、児童の姿を基に紹介している。

事例4 キーワード 造形遊びをする活動の評価、評価方法の工夫

「中庭再発見プロジェクト」(第6学年)

本事例は、第6学年において、造形遊びをする活動や鑑賞する活動を通して資質・能力の育成を目指す題材の事例である。評価規準として「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点全てを設定しているが、本事例では、特に「思考・判断・表現」の評価について紹介している。まず指導と評価の計画について述べた上で、主に造形遊びをする活動における評価情報の収集や評価方法について取り上げている。例として、①フィールドマップや座席表の活用、②デジタルカメラ・ビデオカメラ・タブレットの活用、③ワークシートの活用、④ポートフォリオの活用について、他の学年の例も挙げながら紹介している。さらに「知識」の評価についても、児童の姿を基に紹介している。

図画工作科 事例 1

キーワード 「指導と評価の計画から評価の総括まで」

題材名

のこぎりザクザク生まれる形

内容のまとめ

第3学年 「絵や立体，工作に表す」

1 題材の目標

- (1) ・自分の感覚や行為を通して，形や色などの組合せによる感じなどが分かる。
・木やのこぎりを適切に扱うとともに，前学年までの木や接着剤などについての経験を生かし，手や体全体を十分に働かせ，表したいことに合わせて表し方を工夫して表す。
- (2) ・木を切ったり組み合わせたりして感じたことや想像したことから，表したいことを見付け，形や色などを生かしながら，どのように表すかについて考える。
・自分たちの作品の造形的なよさや面白さ，表したいこと，いろいろな表し方などについて，感じ取ったり考えたりし，自分の見方や感じ方を広げる。
・形や色などの組合せによる感じなどを基に，自分のイメージをもつ。
- (3) ・進んで木を切ったり組合せたりして立体に表す活動に取り組み，つくりだす喜びを味わうとともに，形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養う。

2 題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・自分の感覚や行為を通して，形や色などの組合せによる感じなどが分かっている。 ・木やのこぎりを適切に扱うとともに，前学年までの木や接着剤などについての経験を生かし，手や体全体を十分に働かせ，表したいことに合わせて表し方を工夫して表している。	・形や色などの組合せによる感じなどを基に，自分のイメージをもちながら，木を切ったり組み合わせたりして感じたことや想像したことから，表したいことを見付け，形や色などを生かしながら，どのように表すかについて考えている。 ・形や色などの組合せによる感じなどを基に，自分のイメージをもちながら，自分たちの作品の造形的なよさや面白さ，表したいこと，いろいろな表し方などについて，感じ取ったり考えたりし，自分の見方や感じ方を広げている。	・つくりだす喜びを味わい進んで木を切ったり組み合わせたりして立体に表す学習活動に取り組もうとしている。

3 材料・用具

木（小割一長さ約 50 センチ）、万力、クランプ、のこぎり、木工用接着剤、紙やすりなど

4 指導と評価の計画（6 時間）

観点別学習状況を記録に残す場面等を精選するためには、題材のまとまりの中で適切に評価を実施できるよう、指導と評価の計画を立てる段階から、計画的に評価の時期や評価方法等を考えておくことが非常に重要であり、以下のとおり参考となるような指導と評価の計画を作成した。

なお、日々の授業の中で児童の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことは非常に重要であるため、児童の学習状況を記録に残す場面以外においても、教師が児童の学習状況を確認する必要がある。

時間	ねらい・学習活動	評価の観点と評価方法				備考	
		知識・技能		思考・判断・表現			
		知識	技能	発想や構想	鑑賞		
1	・ のこぎりの使い方を知り、木をいろいろな長さや形に工夫して切る。		○				1，2時間目は記録に残す評価はしないが、技能の視点で児童の活動の姿を捉え、指導に生かす。それを踏まえて5時間目に技能について評価する。
2	・ のこぎりを適切に扱う。						
3	・ 切った木(木片)を並べたり組み合わせたりしながら、表したいことを見付け、			○		↓	3時間目は記録に残す評価はしないが、主に発想や構想について児童の活動の姿を捉え指導に生かす。それを踏まえて4時間目に思考・判断・表現(発想や構想)について評価する。
4	どのように表すかについて考える。			◎ 観察 対話			
5	・ さらに木を切って組み合わせるなどしながら、表したいことに合わせて表し方を工夫して表す。	◎ 観察 対話 作品	◎ 観察 対話 作品				
6	・ 自分たちの作品を見たり、感じ取ったり考えたりしたことを友人と話し合ったりしながら、自分の見方や感じ方を広げる。				◎ 観察 作品カード 対話		◎ 観察 対話 作品 作品カード

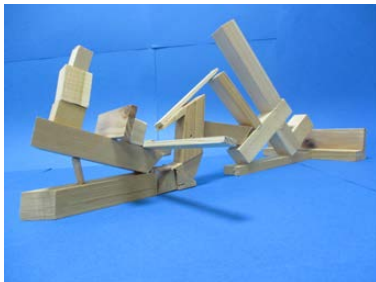
○…題材の評価規準に照らして、適宜、児童の学習状況を把握し指導に生かす。

◎…題材の評価規準に照らして、全員の学習状況を記録に残す。

5 指導と評価の実際（6時間）

時間	ねらい・学習活動	評価	
		評価の観点と評価方法	評価の実際
1	・のこぎりの使い方を知り、木をいろいろな長さや形に工夫して切る。 ・のこぎりを適切に扱う。	○ 技能	のこぎりの使い方や木の切り方などの技能の視点で児童の学習状況を把握し、指導に生かした。  のこぎりで木を切る感覚をつかみ、体全体を働かせてリズムよく切っている。長い木を端から切るだけでなく、真ん中から切る、切り口を斜めにするなどして木の形が多様になっている。
2			
3	・切った木（木片）を並べたり組み合わせたりしながら、表したいことを見付ける。 ・木を切って新しい木片を組み合わせるなどしながら、どのように表すかについて考える。	○ 思考・判断・表現 (発想や構想)	木片を並べたり組み合わせたりしながら表したいことを考えているかという思考・判断・表現（発想や構想）の視点で児童の学習状況を把握し、指導に生かした。  切った木を積み上げてみて、次はどこに置こうかと考えている。
4		◎ 思考・判断・表現 (発想や構想) 観察 対話	思考・判断・表現（発想や構想）の視点で、児童の活動の様子やつぶやきを捉えたり、問いかけたりして記録に残した。おおむね満足できる状況に至らない児童には、木片を使っていろいろな組合せ方を試したり木片をいろいろな方向から見たりするよう促すなど、個別に指導をした。現時点の作品の写真を撮っておき次時の指導に生かすようにした。  木片と木片を組み合わせたり、向きを変えたり、木片を入れ替えたりしながら、どのような形ができるかを考えている。

			 階段のイメージをもち、木の組合せ方を考えて少しずつつなげ、上がっていけるようにしている。
5	・さらに切ったり並べたり組み合わせたりして、表したいことに合わせて表し方を工夫して表す。 ・作品カードに自分の作品のよさや面白さ、表し方の工夫などについて書く。	◎ 知識 観察 対話 作品 ◎ 技能 観察 対話 作品	知識と技能の視点で、児童の活動の様子やつぶやきを捉えたり、問いかけたり、作品を見たりして記録に残した。1, 2時間目に材料や用具の扱いに課題のあった児童がこの段階で技能を働かせて表したいものを工夫して表していたら「おおむね満足できる」状況として捉えた。  木片を重ねたり比べたりしながら組み合わせてできる形の感じに着目している。  表したい感じになるように長細い木片の付け方や木片の組合せ方を工夫して表している。  のこぎりの刃を斜めにして木を薄く切り、それを組み合わせてプロペラの薄い羽を表している。

6	・自分たちの作品を鑑賞し、友人と感じ取ったり考えたりしたことを話し合い、自分の見方や感じ方を広げる。	◎ 思考・判断・表現 (鑑賞) 観察 対話 作品カード ◎ 主体的に学習に取り組む態度 観察 対話 作品 作品カード	思考・判断・表現（鑑賞）の視点で、児童の学習状況を把握した。  自分や友人の作品を見て、よさや面白さ、表し方の工夫などについて自分なりに感じ取り、話し合っている。  友人の作品を見て、鳥の羽の形を動作化することで、造形的なよさや面白さ、表したいことなどを感じ取っている。 また、主体的に学習に取り組む態度の視点で、児童の学習状況を把握した。 作品と作品カード  『大かいだんのひみつきち』 大かいだんをぐねぐねにして二かいに行ったりてんぼう台に行ったりできるようにしました。木をおもしろい形になるように切りました。 階段をつくろうと木片の向きや大きさを考えていた。階段全体が緩やかな螺旋状になるように木片の組合せを工夫して接着していた。一番上の段は横に向いていて、一歩を踏みだすと展望台に着くようになっていっていると話していた。  『そらとぶ りゅう』 口の中にうすい板を入れました。組み合わせる木の形も工夫しました。いろいろな形の三角や四角の木を使ってつくりました。
---	---	--	--

			のこぎりの扱いに慣れるにつれて楽しくなり、どんどん木を切っていった。薄く切ったり、斜めに切ったりした木片の形を生かして竜が口を開けていたり首が曲がっていたりする様子を表すことを思い付いている。木片の形を生かして組み合わせ、工夫して表していた。  『メカとり』 立つところ を工夫しました。見てほしいところは羽です。羽の形を三角にして広がっているようにしました。 三角や四角に切った木片のいろいろな組合せ方を試して表したいことを考えていた。三角の木片の切り口の尖った感じからピンと広がった羽のイメージをもち、鳥を表すことを思い付いた。二本足で立つことにもこだわり、木片を付ける位置を工夫して表していた。
--	--	--	--

6 観点別学習状況の評価の進め方

観点別評価を行うに当たっては、まず、題材の目標に基づき、第2編の「各教科における『内容のまとめりととの評価規準』を作成する際の手順」や第3編の「題材の評価規準の作成のポイント」を参考にしながら、「題材の評価規準」を設定する必要がある。その際、題材の内容、題材の時間数、年間指導計画との関連などを踏まえ、重点を置く観点があるかどうか、ある場合どの観点到重点を置くかを考えながら評価規準を設定することが重要である。その上で、各観点的の評価規準の数や、表現と鑑賞の評価の観点的の関連などについて考える必要がある。

本題材は、まず、児童は、思い思いに木をのこぎりで切り、並べたり組合せたりする。これまでの経験を生かしながら、手ごたえのある材料や用具に向かい「技能」を働かせる。そこから「思考力、判断力、表現力等（発想や構想）」を働かせて、自分の表したいことを次第に見付けていく。そして、どのように表すかについて考え、さらに「技能」を働かせ、表したいことを、表し方を工夫して表していく。このような学習活動であることを踏まえて、本題材では「技能」に重点をおいた評価を行うことにした。また、6時間の題材で終末段階に鑑賞の場面も設定していることから、鑑賞の活動における「思考力、判断力、表現力等」についても評価することにした。「知識」については、主に技能を働かせる場面で評価することにした。そして、これらの学習に主体的に取り組んでいるかどうか全体を通して評価することにした。これらのことを基に題材の評価規準を設定し、評価時期や評価方法に配慮しながら「指導と評価の計画」を作成した。

(1)「知識・技能」

「知識」については、木をのこぎりで切ったり、それらに触れて組合せたりする行為やそのときに得られる感覚を通して、形や色などの組合せによる感じなどが分かり、表すことにつなげている姿を「おおむね満足できる」状況として、主に観察や児童との対話から捉えた。観察では、「作品を多

方向から見て形の組合せによる全体の感じを捉えている」「木片を触りながら表したい形の感じになるように別の木片と組み合わせて接着している」など、木を切ったり木片を組み合わせたたりしている一つ一つの行為を通して、形や色などの感じなどに着目している様子を捉え、造形的な視点としてわかっているかどうかを捉えるようにした。また観察に加えて児童と対話することで、より確かに一人一人の児童の学習の状況を捉えることができる。

「技能」は、本題材において重点をおく評価の観点である。木や木片、のこぎりなどの材料や用具を適切に使い、前年度までの木や接着剤についての経験を生かし、手や体全体を十分に働かせて木を切ったり、木片を並べたりしながら、表し方を工夫している姿を「おおむね満足できる」状況として、主に観察と作品から捉えた。観察では、「のこぎりを正しく持ち、安全に扱って木を切っている」「木をいろいろな長さや形に切ったり、表したいことに合わせて木片を選んだりしている」「表したいことに合わせて、工夫して木片を接着剤で付けている」など、材料や用具を使う児童の具体的な様子を捉えるようにした。作品の分析では、作品全体の印象だけでなく、作品の部分に着目し、材料や用具をどのように使っているかを具体的に捉えた。例えば「木片と木片を多方向から組み合わせている」「自分の表したいことに合わせて材料を選択したり木を様々な形や大きさに切ったりしている」「木片の大きさや形を生かして新しい形をつくっている」「接着面に応じて木工用接着剤の量を調整している」などである。

（２）「思考・判断・表現」

「思考・判断・表現（発想や構想）」については、木片を切ったり組み合わせたたりしながら、感じたり想像したりして表したいことを見付けている姿を「おおむね満足できる」状況として、主に観察や対話、作品などから捉えた。一人一人の表現のプロセスが目の前で展開される図画工作科では、観察は最も重要な評価方法である。児童が「何を感じているのか」「何を考えているのか」などは、児童の動きや視線、会話などを捉えることで、おおむね理解することができる。例えば、木片の向きを変えながら組み合わせていたら、それは、どのように表すかについて考えている様子であると考えることができる。つくりつつある作品を何度も見直し、どこに木片をつなげるかを考えたり、いろいろな角度から作品を見つめて新しい形を見付けていたりしている姿が見られることもある。本題材では、「木片を複数組み合わせている」「自分の表したい形になるように木片を並べたり組み合わせたたりしている」「木片の色の違いを生かして、どのように表すか考えている」など、木片の使い方に着目しながら、それぞれの児童の「思考・判断・表現（発想や構想）」における学習状況を観察や作品から捉えようとした。

なお、題材の後半の段階では、「初めに見付けた形から、更に発展させて新しい形を見付けている」「自分の表したい形になるようどのように表すか考えている」など、活動の過程で発想や構想をしている姿を捉えることにした。その際、初めの段階に活動の様子や作品をデジタルカメラで撮影しておき、後半の活動の様子や作品と比べることで、一人一人の「思考力、判断力、表現力等（発想や構想）」の変容を捉えることができた。

「思考・判断・表現（鑑賞）」については、木片の形や色の組合せによる感じなどを基に、自分のイメージをもちながら、自分たちの作品の造形的なよさや面白さ、表したいこと、いろいろな表し方などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げている姿を「おおむね満足でき

る」状況として、主に観察や対話、作品カードなどから捉えた。

しかし、本題材では、木片を組み合わせながら表したいことを見付けることが重要であるため、「思考・判断・表現（発想や構想）」を中心に評価していく。

（３）「主体的に学習に取り組む態度」

「主体的に学習に取り組む態度」については、つくりだす喜びを味わい進んで木を切ったり木片を組み合わせたりして立体に表す学習活動に取り組もうとしている姿を「おおむね満足できる」状況として、観察や対話、作品、作品カードなどから捉えた。具体的には、発想や構想することに進んで取り組んでいるか、技能を働かせることに進んで取り組んでいるか、鑑賞することに進んで取り組んでいるかを、題材全体を通して捉えた。

本題材は、児童の興味や関心に著しい差が生じる題材ではなく、多くの児童が粘り強く取り組んだり、学習を調整したりするなどして主体的に取り組む題材である。しかし、のこぎりなどの扱いに不安を感じ、主体的に学習に取り組むことができないことも考えられることから、そのような児童を題材の始めの段階において把握し、適切な指導を行うことで「主体的に学習に取り組む態度」に影響が出ないよう配慮した。例えば「のこぎりで切ろうとしたら、木が動いて思い通りに切ることができない」という場合は、「木を万力やクランプでしっかり固定し、両手でのこぎりが使えるようにする」ことについて指導する。「切り始めに、のこぎりの刃が思い通りに入っていない」という場合は、「切り始めは、跡を付けるように軽く刃を動かす」などの指導を行った。また、木片と木片が思い通りに接着できない児童には、木片の接着面に着目させたり、接着剤の量などに注意させたりするなど、適切な扱いを指導した。なお、学期等の総括に役立つ特徴的な姿については記録をしておいた。

また、本事例は作品を持ち帰り飾る場所を考えて飾るという指導を行っている。このようなことも、児童が進んで学習に取り組むことにつながっていく。

７ 観点別学習状況の評価の総括

本題材では、題材の評価規準に照らして、適宜、児童の学習状況を把握し指導に生かす評価（○）と、題材の評価規準に照らして、全員の学習状況を記録に残す評価（◎）を設定し、題材全体を通して、観察の記録と作品の見取り、感想、そして児童との対話などを参考にしながら、観点別学習評価を行った。例えば、本題材では１，２時間目に「技能」を働かせる活動場面がある。中にはのこぎりの扱い方に慣れずなかなか木が思い通りに切れない児童がいる。そこで、材料や用具を適切に扱えているかを評価し必要に応じて指導をした。そのことによって、活動の後半では、児童が自分の思いで活動を進め、技能を働かせて工夫して表す姿につながっていった。このことを踏まえて「技能」については５時間目に記録に残す評価を行った。

評価の総括は、題材の評価規準に照らして、主に、指導と評価の計画で明示した全員の学習状況を記録に残す評価を基に行う。

本事例における観点別学習評価の総括の例

氏名	観点		記録に残す評価	総括	メモ
〇〇 〇〇	知識・技能	知識	B	A	
		技能	A		
	思考・判断・表現	発想や構想	B	B	
		鑑賞	B		
	主体的		B	B	
△△ △△	知識・技能	知識	A	A	
		技能	A		
	思考・判断・表現	発想や構想	A	A	
		鑑賞	B		
	主体的		A	A	
□□ □□	知識・技能	知識	B	B	
		技能	B		のこぎりに不安を感じていた→クランプで木を固定するように指導
	思考・判断・表現	発想や構想	C	B	
		鑑賞	A		
	主体的		B	B	

総括では、「知識・技能」は「知識」と「技能」を、「思考・判断・表現」は「思考・判断・表現（発想や構想）」と「思考・判断・表現（鑑賞）」とを考え合わせて総括することになる。

その際に、年間指導計画上の題材の位置付けを考慮する必要がある。例えば、本題材の場合、「技能」は重点的に指導する題材であること、「思考・判断・表現」については、「思考・判断・表現（発想や構想）」を中心に評価したことから、総括においても、基本的にはこの視点を基に行っていく。

例えば、〇〇さんは「知識」はB、「技能」はAであり、総括としては「知識・技能」はAとしている。△△さんは「思考・判断・表現（発想や構想）」A、「思考・判断・表現（鑑賞）」Bであり、総括としては「思考・判断・表現」はAとしている。

しかし、総括においては、基本的な総括の方針を重視しながらも実際の児童の活動の内容に即して評価を行うことも大切である。例えば、□□さんは、「思考・判断・表現（発想や構想）」はC、「思考・判断・表現（鑑賞）」はAであるが、鑑賞の際に友人の表現の発想や構想したことについて、感じ取ったり考えたりし、さらに次はこんなことを表したいなど話している姿や作品カードへの記述が見られたことから「思考・判断・表現」をBと総括することにした。□□さんに対しては、今後実施する他の題材において、表したいことを見付ける場面で、友人の活動に目を向けるように指導したり、鑑賞の場面で友人の作品のよさや面白さを感じ取ることができたことなどを価値付け、発想や構想する学習に主体的に取り組もうとするようにしたりすることが重要である。

題材によっては、本題材のように評価する資質・能力の重点化をせずに、観点別学習評価を行う場合もある。その際は、記録に残す評価の回数に応じて総括するなど、あらかじめ基準を決めておくことが大切である。